

貨幣経済は発展して、①農民層は分解して富農大地主が生じ、江戸と地方を結ぶ五街道および運送船の大型化により商品流通は円滑かつ大規模化して豪商高利貸の権力が伸び、②一八三〇（天保）年代以降飢饉と百姓一揆が頻発して封建社会の変革を求め、政治改革の必要に迫られたが、幕府や諸藩の対策はその効を奏しなかった。

さらに、変革を不可避にし急速に推し進めた原因に、続々押し寄せる欧米諸国のアジア進出がある。早くも一六世紀にはポルトガル（天文十二年—一五四三、種子島に鉄砲伝来）・スペイン（一五七八、マニラに根拠地）が現れ、一七世紀に入ると先進二国に代わり英・蘭・仏が印度——南海地方に着々地盤を固め、通商重視のオランダの我が国との接触は早く（寛永十八年—一六四一、平戸から長崎出島に商館を移す）、北シベリアではロシアの馬蹄が響く。一八世紀後半には欧米の新体制整い（一七七〇年ごろ英の産業革命・印度支配、一七七六米合衆国独立、一七八九仏大革命）東洋進出めざましく、日本近海には英・露の艦船が頻々と出没し、一八四二年大清国も阿片戦争に敗れて英国に香港島割譲、五港開港のやむなきに至り、日本は米国ペリー艦隊に太平の眠り覚ま

第六節 維新の夜明け

砂糖地獄に苦しみつつも南海の島々には昔ながらの太平の日は昇り、貧しいながらも山野の作物は飢えを救うには足り、夜は三味線の音に生を楽しんでた。時に北空に尾を引く異様な星影を認めたものの、隔離の世界は依然安穩の天地であった。

しかし時世の荒波は、すでに島国に押し寄せていた。江戸時代二百五十年は泰平続き農工業の生産は向上し

され、安政元年（一八五四）和親条約へと進む（同五年井伊大老、日米通商条約、続いて蘭・露・英・仏とも結ぶ）。

琉球も決してその枠外ではなく、欧米からの波は真っ先に受ける位置にある。英米艦隊の長崎や浦賀への来航にはまず琉球に寄港し阿片戦争ごろその出入最も多く、八重山・宮古では土地測量・動植物の採集を行い、英・仏は宣教師を那覇にとどめて（英ベッテルハイムは滞在八年）内情調査に従事せしめ、和親通商の条約も日本と相前後して要請している。これに対し薩摩藩では弘化三年（一八四六）通商の要求やむを得ざれば受けても可と内示しており、安政五年藩主斉彬の密使市来四郎（広貫）は駐留フランス人を仲介に蒸気船・大砲小銃の購入、留学生の派遣を企図している（同年七月斉彬公急逝し中止）。時勢に明るく修交の不可避を確認し泰西文物の先取りを図る薩摩と琉球の置かれた立場を見るべきである。

江戸幕政末期は尊皇攘夷、勤王佐幕の声に揺れ動いたが、世界の流れに対応し民心を結集して挙国一致の態勢

を結成するには、全国民統合のシンボルたる皇室を中核とする中央集権を樹立する以外になく、やがて大政奉還と成り、戊辰の戦果を経て明治四年廢藩置県で庶政一新の明るい夜明けを迎える。

その変遷は以下各項で詳しく説かれるであろう。

（甲斐不二男）